

## 国際アマチュア天文家連盟の第4回総会

下 保 茂\*

1978年8月13日から19日まで、アイルランドの首都ダブリンで国際アマチュア天文家連盟 (International Union of Amateur Astronomers, 略して IUAA) の第4回総会が開かれ、日本からは宮本正太郎氏を發起人として10人が出席した。

IUAA 総会は今回は第4回であるが、今までは3年おきに次のように開かれている。

第1回 イタリア・ポロニア 1969年

第2回 スウェーデン・マルモ 1972年

第3回 カナダ・ハミルトン 1975年

初代の会長はイタリア・ポロニアのバルディネリであるが、現在の役員は次の通りである。

会 長	パロカス	(イギリス)
副会長	アンスプロ	(アイルランド)
"	スパーリング	(USA)
会 計	ディーズイ	(アイルランド)
シクレタリー	キルブライト	(アイルランド)
"	リンデ	(スウェーデン)
"	チオルコウスキー	(ポーランド)
編 集	リーニイ	(イタリア)
顧 問	オブライエン (カナダ), グナワルデス (スリランカ), 宮本正太郎 (日本), バルディネリ (イタリア), ギミネ (スペイン)	

委員会は次の9個がある。

変光星	委員長	ケリー	(アイルランド)
惑 星	"	ロビンソン	(イギリス)
流 星	"	サイモンズ	(USA)
歴 史	"	キンダー	(イギリス)
教 育	"	オブルカ	(チェッコ)
太 陽	"	ギル	(イギリス)
電 波	"	ライトマン	(USA)
彗 星	"	(日本人を予定)	
月	"	ムーア	(イギリス)

今回の第4回総会はダブリン市内のユニバーシティ・カレッジの講堂を会場として催され、20か国から約90人が出席した。第1日の8月13日は出席会員の登録と、夜はレセプションがあったが、吾々は欠席した。日本から

の10名は第2日の8月14日から16日まで出席した。

8月14日午前は開会のセレモニーで前面壇上に7名の役員などが座り、次々に立って挨拶や祝辞があった。会長パロカス、前会長バルディネリ、ダブリン市長ベルトン、カレッジの学長キーラム、ダンシング天文台長ウエイマン、名誉会長オブルカ、アイルランド天文学会ダブリン支部長のシムスらである。コーヒー・ブレイクの後引きつづいて午後にかけて、会長、会計係やシクレタリーによる報告や事務的な相談が夕方までつづいた。これらの相談は日本のような前もっての素案が全然なく、一つの事がらについて、10人近くもの人が次々に立って、ゆっくり議論するのは印象的であった。

15日の午前は事務的な会議の後、日本からの4氏の研究発表があった。森久保茂氏の流星塵、藪保男氏の日本における流星観測、山口正博氏の月食時の月面の明るさ、加藤一孝氏の学校の天文教育におけるアマチュア天文家の役割についての4つの報告である。この研究発表は仲々好評で、何人かの質問や討論があった。終ってから聴衆の一人から、「これらの発表はこの総会のハイライトだ」という声もきかれた。

同日の午後はバスでダブリン南部のウィックローへ遠足、なだらかな起伏にひろがる草原の牧場に牛の群が遊ぶアイルランド風景を満喫した。

第4日は列車で北アイルランドのアルマー天文台とブ

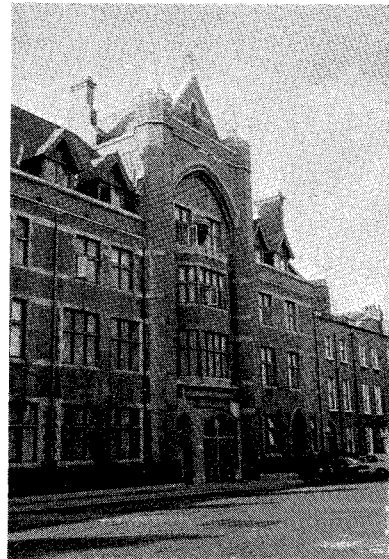


写真1 第4回 IUAA 総会々場のダブリンユニバーシティ・カレッジの講堂。

\* Shigeru Kaho: The Fourth General Assembly of International Union of Amateur Astronomers

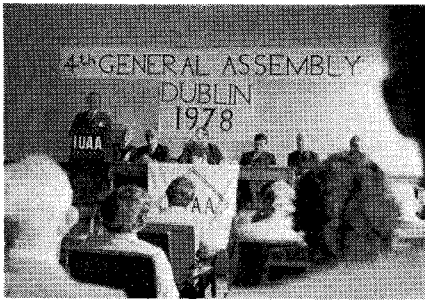


写真2 IUAU 総会の開会の挨拶。立つはチェッコのオブルカ氏。

ラネタリウムの見学旅行であった。ダブリン——アルマ——間は列車2時間、バス20分ていどの行程、列車はテーブルをはさんで4人ずつの席で昼食をとりながら行くものである。

その時お向いの席はカナダの西岸ビクトリアのG. ボール氏夫妻、自宅に15cmのシュミットをもっているとのこと、また自作の40cmまで磨ける研磨機と、25cmまでのアルミナイズできる真空槽をもっていて自分の鏡のアルミナイズをやるとのことで、それらの装置の写真を見せてもらったが、なかなか立派なもので感心した。アルミナイズの装置まで自分が作るのには私ははじめて聞いた。ボールさんは自宅からドミニオン天体物理天文台がよく見えるということであった。

アルマー天文台は1790年に建てられた古い天文台で、現台長はMart de Grootである。望遠鏡は30cm, F 4.5のシュミットカメラ、25cm, F 12の屈折を見せてもらった。シュミットの架台は1850年製の倉敷天文台の古い30cm反射の架台と同じように、架台の上部が斜にねていて、それがそのまま極軸になったような型である。彗星、小惑星の観測をしている。25cm屈折は1885年製の架台である。極軸をまわすウォームギヤは、45°ぐらいの部分ギヤであった。これは二重星、惑星の観測に使っているとのこと。

岡山天体物理観測所の188cm反射を作ったグラブ・パーソンズ会社の発祥はアイルランドのダブリンで、トーマス・グラブによって1880年代の始めである。そのころは単にグラブといったので、アルマー天文台の2台の架台には、大きくGrubb Dublinと浮文字がでていた。グラブは1918年トーマスの子ホワードの時、イングランドのセント・アルパンス（ロンドンの北約30km）に移転し、1925年に全部の事業をパーソンズに譲った。パーソンズはニューキャッスルに新たにグラブ・パーソンズ会社を設けたものである。10年後にはカナダにデビッド・ダンラップ天文台の188cm反射を完成している。

アルマー天文台はアイルランドのダンシンク天文台、アメリカのハーバード天文台と共同で南アフリカのブル

ムフォンタインに32インチのシュミットカメラもっている、三つの天文台の頭文字をとってADH telescopeと呼ばれている。これはパーキンエルマー製でF 3.75のカセグレン・シュミットで、1951年にハーバードに古くからある24インチのブルース天体写真儀の架台にのせて据えつけられた。

アルマー天文台でプリンク・コンパレーターの説明をしていたジョン・マクファーランドは2日前にADHから帰ったばかりとのことであった。このプリンクは15×15cm乾板用、メカはグラブ・パーソンズ製、光学部はハーグリーブ & コックス製とのことである。

後で帰りの駅までのバスの中で、隣りの席のダンシンク天文台のベネットに聞いたところでは、このあたり北欧では夏は白夜のため、5~8月は観測は休業で、交代でアフリカへ行ってADHを使うのだとのこと、ダンシンクはダブリンの北の郊外にあり、30cm屈折があり、これは二重星の眼視観測に使うとの事である。観測者4、助手4、学生2とのことであった、観測者はアルマーとかけもちの人も多いように見られた。

概していえることは、天体の観測ではヨーロッパは設備の点でアメリカより劣っているが、アイルランドはさらにヨーロッパの中でも片田舎といった感じがして淋しい想いがした。これは矢張りこの土地が何百年の間、政治的にイングランドと抗争をつづけてきたこともあり、またアイルランド全体の土地の広さは日本の北海道と同じ、人口は静岡県南みといった経済的に恵まれない点が理由であろう。

アルマー天文台の隣り合った敷地のプラネタリウムで展示物やプラネの解説をきいた。展示物はなかなか豊かで見ごたえがあった。天文台、プラネはそれぞれ政府か政府系の施設だとのことであった。

帰りの列車の中では名誉会長のオブルカ（チェッコ）と向い合って座った。オブルカは最近日本の会社で外国の4m望遠鏡の架台部を作っているのに、何故自国のために大反射鏡を作らないのかと聞かれ、苦しい返答をさせられた。

吾々はこのエクスカージョンの後、次の日ダブリンを後にした。総会はこの後17日研究発表と委員会報告、18日ムーア教授の講演、19日は新任の会長、委員長などの挨拶の予定があった。なお1979年からの会費は個人5ポンド、団体15ポンドを会計のMr. Deasyに払いこんでほしいとのこと、Deasyの住所はArd Faill, 633 Howth Rd. Raheny, Dublin 5, Ireland.

今回の総会は1981年開催予定であるが、場所は未定とのこと、これらの事項は役員の人事もふくめて、10月16日セクレタリーであるスエーデンのPeter Lindeの手紙によるものである。